

## LOG

千光寺山の坂道の中腹に伝統家屋に挟まれて建つ LOG は、尾道の秘められた宝石の一つです。元々は 1963 年に新道アパートとして建てられたこの建物は、スタジオ・ムンバイを創設した建築家、ビジョイ・ジェイン氏の手でリノベーションされ、Lantern Onomichi Garden（ランタン・オノミチ・ガーデン）の頭文字を取って LOG と改名されました。スタジオ・ムンバイにとっては、インド国外で手がける初めてのプロジェクトでした。

ジェイン氏は私的な建物だった 3 階建てのアパートを、庭園とカフェとバー、そしてイベントスペースを備えた文化的拠点に生まれ変わらせました。地域住民と観光客の交流を促進するために、地元・尾道の食のイベントやマルシェをはじめ、建築家や工芸作家のトークイベントなどを開催しています。ジェイン氏のスタイルは、建築物が風景を支配するのではなく、風景の一部になることを重視しており、そのために自然の素材を使用して、地元の職人と仕事をすることを好みます。

LOG を周囲に溶け込ませるために、ジェイン氏は既存の鉄筋コンクリートの構造を土や漆喰、小石といった自然素材で覆い、建物によりソフトで質感に富んだ有機的外観を与えました。ジェイン氏は LOG をより滑らかで親しみやすいものにするために内装の表面に曲線を使うことにこだわりました。内装の豊かで柔らかい色合いは、地元職人との共同作業によって生まれたものです。

ジェイン氏はまた、1 階と 2 階にあった元の壁の多くを撤去し、よりオープンスペースのあるピロティを創りました。このことで人間同士の、そして人間と周囲の環境との距離が、狭まっています。LOG は近隣の古い家屋や尾道水道の素晴らしい眺めが楽しめるだけでなく、建物の中と外に同時に存在しているような感覚をもたらしてくれます。

2 階のカフェは地元の果物を使った飲食物を提供しています。夜になるとカフェはバーになり、レコードプレーヤーから流れる音楽を聴きながら日本産のワインやウィスキーでくつろぐことができます。バーは部屋の角から延びる形になっており、曲線を描く木材が柔らかいパステル調の赤と緑の壁と床に見事にマッチしています。

LOG の最上階にあるホテルの 6 つの客室は床と天井も含めて一和紙職人、ハタノワタル氏が手がけた柔らかい白い和紙（伝統的な京都の黒谷和紙）で覆われています。紙の色と質感が、和紙を通した光が扉や窓に当たる様と相まって、まるで繭に包まれているかのような安心できる居心地の良さを、どの客室にももたらしています。和紙の柔らかい感触に囲まれて LOG の部屋に泊まることは、世界の他のどんな場所でも味わえない宿泊体験です。

LOG のリノベーションのプロセスに興味がある方は、現地のギャラリー（宿泊者のみ見学可）を訪れるといいでしょう。建物の元のコンセプトスケッチや模型、塗料、LOG を創るに当たっ

て使用した材料の見本が展示されています。